

## 後夜祭

燃えよ！ 孤独な  
夢想家の焰  
潜在する詩人の焰！

31日 P・M 8:00  
於 安田グラウンド

### ファイアストーム

一人の夢想家が孤独な焰を見つめる中から、夢想のどんな更新を手に入れるか。

あらゆるイメージの中で焰のイメージ程素朴であり、この上もなく綿密巧緻でもあり、慎しくもあれば狂気じみているものはない。

焰のイメージは詩のしるしを持っている。

焰の夢想家は全て潜在的な詩人である。

その遠い過去に根ざした現初的感嘆は見る喜びに強調の因を与え、見慣れたものの彼岸を明らかにする。

焰を前にした夢想の恒常的な法則とは、彼自身の過去のみならず、世界の最初の火の過去に生きる。

こうして、焰の凝視は原初の夢想を永続させ、それが我々を世界から引き離し、夢想家の世界を拡大する、しかしあまりに遠くを見ようとするため「ひとは夢想の内におのれを失う」のだ。

焰の夢想家が焰に向って語りかけるとすれば彼は自分自身に語りかける詩人なのだ。

世界と世界の運命を拡大し、焰の運命について、思いをこらすことを通じて、夢想家は言語を拡大する、彼こそ世界の美を表現できるのだ。

夢想というべきこの精神習性はわれわれの存在のこのドゥーブル、思索する存在の、このクレール・オブスキュールで、その自身の安泰をもつ。しかし、夜の夢は幻想的な偽りの照明に支配され、内密性に隠された、その夢には、劇などないのだ。

寓話という単純明快な構造からどんな人でも寓意を引き出せる。

それ故、聖書の物語やギリシア神話の夢想は無数のパロディから成り立つ。だが、しかし、現代の寓話たる寓意を読みとるには、一体どこにその焰を見ればいいのか。

孤立した焰は孤独な夢想家とを一体化する孤独の証である。

孤独な焰よ、わたしはひとり、かなしみか、それとも諦めか、それとも共感か絶望か。

わたしの思想は火の中で失くしてしまった。それあってこそ、形も知れた皮膜を。

それは火災に逢って焼けてしまった。

わたしが火元で、燃え種でもある火災に逢って。

だから私はもういない。

わたしは内部だ、焰の軸だ。

.....

だから、わたしはもういない。

しかし、新しい欲望が身内に目覚める。

足下に横たわる静かな世界。

ただあの夕日の永遠の光を飲むために。

どこまでも遠く、おれは駆けてゆくのだ。

